

巻頭言

日盲社協の課題

点字図書館部会長 川越 利信

日盲社協（社会福祉法人日本盲人社会福祉施設協議会）の基本的な課題は、「施設」の在りようとしての使命感をもつことである。いま、施設の多くは施設経営者や従事者の就労の場としての施設に陥っていないか。視覚障害者に頼られる施設へ脱皮していかなければならないように感じる。このことに気づき、日盲社協は長い低迷期から板山賢治理事長を先頭にいま変わろうとしている。スローガン「行動する日盲社協」を旗印に脱皮しようと動きが始めている。具体的には、以下の4つの委員会が動き出した。各委員会には、日盲社協の会員以外の人にも入ってもらい、広い視点の委員会活動を目指そうとしている。

国際交流委員会……①日盲社協の国際交流、協力に関すること。②「アジア障害者の10年」に関すること。

芸術・文化委員会……①盲人福祉施設における芸術文化の振興に関すること。②会員施設の芸術・文化の交流発表活動に関すること。

従事者研修・資格委員会……①施設長および職員研修の企画、実施に関すること。②従事者の資格問題に関すること。

企画委員会……①日盲社協活動の基本問題に関すること。②部会のもつ諸課題の解決の方策に関すること。③制度改善、予算対策に関すること。

さる10月11日、第1回企画委員会が開催された。そこでは、二カ所の土地（一カ所は借地）の活用を含む抜本対策と盲導犬事業について厚生省と話し合いをするためのプロジェクトチームの編成が決定した。集まって言い放しという傾向にあった今までとはこのあたりが異なって、具体的な行動を起こすのがいまの日盲社協である。このようにいま変わろうとする日盲社協の当面の課題は、会員、部会の関わり方だろう。視覚障害者の利益を考えながら具体的な行動を継続できるのか。この一点にかかっているように思う。予算も課題である。活動が活発になれば、支出が増大する。予算対策も必要となる。でも、少々楽観的かも知れないが、予算は社会的に必要な仕事を適切な方法で展開するとき、自然に生み出されてくるような気がする。基本はわれわれの関わり方だろうと考える。

ところで、点字図書館部会は、全点協（全国点字図書館協議会）というもう一枚の看板を持っている。この全点協の場合、どのように変わろうとしているのかみてみたい。

点字図書館の役割は視覚障害者への情報提供である。情報は社会参加の基本条件である。いつでも自由に情報が摂取できなければ視覚障害者の社会参加にはいつまでも困難性がつきまとう。この意味において、情報提供施設としての点字図書館は視覚障害者の社会参加に深く関わっているといえる。

全点協は「てんやく広場」というネットワーク・システムをもっている。67のプリンティングセンター（アクセスポイント）があり、うち57カ所が点字図書館である。年間約5,000～7,000冊の「共有の蔵書」が増え続け、登録される。そして、いつでもオンラインで利用できる。視覚障害の個人利用者は平成7年10月現在で250人。彼らはいつでも自宅から「てんやく広場」にアクセスできる。何事においてもそうであるように、「てんやく広場」ネットも解決しなければならない課題をたくさん抱えている。とりわけ、財政の安定化は大きな課題であるが、大局的には順調であり、視覚障害者の情報環境を変えつつあるといえる。

しかし、社会全般の情報環境は、まさに日進月歩で激変している。なかでもインターネットはこの半年ばかり前から急速に普及し始め、障害者の分野でもホームページをつくりはじめている。

このような社会の情報環境のなかで点字図書館が担っている部分を客観的にみてもみると、きわめて狭い範囲であることを認めざるを得ない。単行本を中心に郵送主体の、牧歌的ともいうべきサービス状況である。視覚障害者の社会参加を促進するための情報提供施設であると、胸をはっては言いにくい。点字図書館界は、いまの、あるいは将来の情報環境を積極的に活用する努力を怠っているとと言われても仕方がないような状況にある。

視覚障害者への情報提供施設の在り方については、現場の第一線でサービスを展開している点字図書館関係者よりも、むしろ行政の方が時代を先取りしているように思う。身体障害者法ならびに設置基準は、既に「視聴覚障害者情報提供施設」（身障法第33条）と書き換えられている。にもかかわらず、いつまでも点字図書館の看板にこだわり、旧態依然のサービス方式にとどまる点字図書館界は時代に取り残されなければいいが…。

希望が持てないわけではない。去る10月25日から27日まで名古屋で、第21回全国点字図書館大会が開催された。今大会では「変わろう」発言が相次いだ。その背景としては、幾つかのことが考えられる。点訳図書の製作方法においては、パソコンを活用している施設とそうでない施設に明らかに格差が生じた。また、「てんやく広場」ネットワークでサービスを展開する施設と旧態依然の施設にサービスの格差が生じはじめた。そこにもってきて、録音図書、音声情報分野までが、デジタル時代に入ってきた。

社会の情報環境もさることながら、視覚障害者の情報環境も変化しつつあるのである。点字図書館界はさらに、「変わろう」から一步踏み込んで「変わります！」宣言をする必要がある。そして、具体的な行動を起こして、いまのあるいは社会全般の情報環境に対応できるように、「点字図書館」から「情報提供施設」に脱皮しなければならない。

日盲社協が視覚障害者のために役立ち、頼られる施設集団として社会的な位置づけを確保し続けるためには、関わるわれわれが時代認識と使命感を明確にもつことだろうと考える。